

「フム座蒲團を持つてる化物やら苮盆を提げてる化物やら、中に化物の頭かしらん高い處へ上つて明
晩もお早ようからお越を願ひますとお低頭をしたが、彼れは化物の親分か」

「そら何を云ふねア、云ふ悪い噂の立つた處は人寄り場所にしたら宜かろうと、今度彼處へ講釋の新
席が建つたんや、處が席が綺麗なとこへ先生が上等で讀物が宜いので毎晩大入や」

「先生て誰やね」

「後藤一山と言ふ先生や」

「ゲエそんならお前の云ふてる後藤一山と云ふたら背のチョツと高い」

「然うや、ぶつてりと肥へた」

「色の白」

「鼻の高」

「耳の兩頬に二ツ有る」

「耳は二ツなうてかい」

「なそんなら彼の後藤一山か」

「そうや」

「アララ〜〜」

「オイ喜いやん、何うしたんやお前泣いてるな」

「聞いて呉れ、聞いて呉れ、私今年二十八や」

「誰がお前の年を改めて聞いている」

「始めて女が出来たんや」

「コレ一寸待ちんか、いまどきの若い者が二十八にもなつて始めて女が出来たと自慢をする奴がある
かいな」

「それが他の女なら自慢をせんが横町の水引屋のおまやんや」

「おまやんと云ふたら町内で今小町と混名を取つてるねで」

「そうや、混名御輿娘とも云ふね」

「なんで御輿娘やね」

「皆若い者が肩入に行てるが未だにお渡りがないと云ふ」

「コレ泣いて居て俄をする奴が在るか、何うしたんや」

「マア聞いて、辻の角でおまやんにベツタリと逢ふたんで、おまやん宜い處で逢ふた一寸話が有るね其
處まで附合ふてんかと風呂屋の横手のろうじへ入つて二人でボシヤ〜と話をしてると、其處へ來
たのがその後藤一山や、講釋師と云ふもんは六ヶ敷い物の云ひようをするで、夕景ゆづいより腹中がシク